

「農山村の環境と生活文化から学ぶ都市との交流」



2017年4月15～16日(土/日)

神奈川県相模原市緑区(旧藤野町)の「篠原の里」

趣旨：日本の農山村、とりわけ山間地の集落では、過疎高齢化の影響が深刻となり、長年受け継いできた自然と調和した伝統的な暮らしが消滅する寸前に立ち至っています。一方で、何百年、時には千年以上にわたって暮らしを維持してきた集落に蓄積されてきた伝統的知識体系や技能には現代的にも高い価値があり、「持続可能な社会づくり」には不可欠です。自然だけではなく、身近な土地からさえも切り離されて世代を重ねた都市部の住民にとっては、この知恵や技能を総合的に体験し、自らの暮らしの組み立てを考える機会が極めて有効です。

4月15日(土) 伝統知研究会シンポジウム (※ 要昼食持参)

10:00～10:10 挨拶・総合司会 中込卓男さん(自然文化誌研究会代表理事)

10:10～10:40 基調報告 高野孝子さん(早稲田大学教授)

10:40～11:40 伝統知研究会報告 大前純一さん(NPO 法人エコプラス事務局長、新潟県南魚沼)

黒澤友彦さん(自然文化誌研究会事務局長、山梨県小菅村)

11:40～13:00 昼食、ポスター・セッション

13:00～14:30 話題提供 設楽清和さん(パーマカルチャー・センター代表)

高橋靖典さん(トランジション・タウン藤野、藤野倶楽部)

渡辺隆一さん(信州大学特任教授)

14:45～17:00 座談会風の総合討論 司会 中込貴芳さん(自然文化誌研究会副代表理事)

17:30～ 交流会(夕食懇親会)

4月16日(日) シンポジウムのまとめと現地ツアー (※ 昼食は各自で。現地の百笑いの台所などをご

紹介します)

9:00~10:00 シンポジウムのまとめ

10:00~12:00 現地ツアー： 『藤野サステイナブル・スポット・ツアー』

藤野という里山地域に根づきつつある持続可能で身の丈に合った暮らし。その具体的な営みを体感できるスポットを見学してみませんか。パーマカルチャー・センターの見学後、結びの家でトランジション・タウンの実践についてうかがいます。

参加対象： 生涯学習や学校教育、地域づくりや都市・農山村交流、トランジション・タウンや

パーマカルチャーに関心をもつ学生、行政や企業人、実践者、研究者、市民ほか。

主催： NPO 法人自然文化誌研究会、NPO 法人エコプラス

共催： エコミュージアム日本村（トランジション小菅）/ミューゼス研究会、

トランジション・タウン藤野、トランジション・ジャパン

協力： 東京学芸大学環境教育研究センター

後援： 小菅村、藤野観光協会、農業生産法人藤野倶楽部

連絡問合先： NPO 法人自然文化誌研究会事務局

npo-inch@wine.plala.or.jp TEL : 090-3334-5328

参加費：

一般： 資料代 1000 円、宿泊費 3500 円、懇親会費 3000 円

学生： 資料代 500 円、宿泊費 3000 円、懇親会費 1000 円

シャトルバス（JR 中央線藤野駅⇄篠原の里）片道 500 円

4月15日 藤野駅 出発時間 9:00 9:35

篠原の里 出発時間 17:30 18:10 20:15



参加申込： 氏名、所属（一般・学生）、連絡先（住所、電話、メールアドレス）、宿泊か日帰りか、懇親会参加の有無、シャトルバスの利用の有無、ポスター等展示の希望の有無（要旨 A4 で 1 枚）などを記載して自然文化誌研究会事務局にメール（npo-inch@wine.plala.or.jp）か電話で申し込んでください。

自然文化誌研究会ホームページに申し込みフォーマットもあります。

詳細なご案内はウェブサイト <http://www.milletimplic.net/collegefores/applic.html> にあります。



伝統知を生かした交流と学びの場

高野孝子さん（早稲田大学教授・NPO 法人エコプラス代表理事）

日本の農山村の多くでは、自然から持続的に恵みを取り出す知恵や、自然に近い生活から生まれる哲学や洞察が長年受け継がれてきた。近年、とりわけ山間地の集落では、過疎高齢化に伴い、そうした伝統知やライフスタイルそのものが、集落や人々とともに消えようとしている。自然文化誌研究会とエコプラスを中心とした調査研究チームは、何百年と暮らしを維持してきた集落の技や知識には、「持続可能な社会づくり」への示唆が豊かに残されていることを前提として、都市と農村住民の交流プログラムを実施し、過去3年に渡ってデータを収集した。それは、単なる「自然体験」ではなく、その地に育まれた生活文化全体を題材とした都市との交流であった。そうした機会を通して、参加者が伝統知についてどのような価値を見出したか、都市であれ農村であれ、持続可能な社会づくりの手がかりとなるかを考察した。ここでは研究会の全体の報告として、幾つかのプログラムならびに調査結果の概要を報告し、見えてきた課題と可能性について言及する。



苦役を学びに 大前純一さん（NPO 法人エコプラス事務局長）

私たちが活動をさせていただく新潟県南魚沼市の山里は、4m を越す雪が積もる豪雪地帯である。毎朝のように玄関前に腰までの雪が積もり、その除雪だけでもくたびれる。夏場、山の斜面に広がる美しい棚田は、田んぼよりもあぜの傾斜面の面積の方が広いといわれ、村人は6月から9月まで、あぜの草刈りに追われる。どちらも「苦役」でしかない。その雪掘りは都会の人間からすると、スキーとはまったく違ったアクティビティになる。草刈りで

絵文字を描けば「草刈りアート」だ。参加者は、体を動かし、蓄積した技を教わり、人々が何百年にもわたって積み重ねてきた暮らしを学ぶ。そこから改めて都市化し近代化した私たちの暮らしを見つめ直し、持続可能な未来を考える。わずか数十年しか経ていないいまの私たちの暮らしの姿をよりよくするために、改めて足もとを見直すときだ。



伝統知～知恵と効率化 黒澤友彦さん（自然文化誌研究会）

知恵の獲得・・・伝統知は、生業からの獲得が最短の道のように。薪集め、狩猟、採取、雪履きなど、日常生活の中に生業が伝統的に組み込まれている地域である農山村・山梨県小菅村より報告をします。小菅村は多摩川源流に位置する標高 650m、人口 700 人の農山村です。ここ数年、山村留学制度や地域おこし協力隊などの移住者でにぎわってきています。



新たな持続可能な文化の生成について

設楽清和（日本パーマカルチャーセンター）

パーマカルチャーとは持続可能な生活をベースにしながら地域コミュニティとそこに生じる文化を生成していくことを目指しています。グローバリゼーションによって地域の文化は自然と共に破壊され、人は自らのアイデンティティーの拠り所と、生活の安定を失ってしまいました。地域の特性とそこに生きる人々の地域の資源を用いて生活のレベルを高めていく創造力により築かれてきた文化の街を見直し、それらが内包する様々な知恵や技術を未来に向けて生かしていくことが、これから私たちが取り組むべきことであると考えます。パーマカルチャーを通して見いだすことができるこれらの文化の様々な特性を明らかにすると共に、これらを生かして地域づくりを行っていく実践についての報告を行いたいと思います。



境界のまち「藤野」の社会的な価値

高橋靖典（トランジション藤野・農業生産法人 藤野倶楽部）

藤野は首都圏からみると、車でも電車でも約1時間-1時間半。都内で仕事を持っていても、なんとか通勤ができる場所に位置しています。地形としては中山間地域であり、平地の少ない山間の地域で、大規模な農業をするには不利な場所です。移住や経済という視点からこの地域を見た場合には、本当に奥まった田舎までは移住できないケースで、消費地でもある首都圏とのつながりも持った上で暮らせるエリア、自然の多い田舎エリアへの境界線のまちとも言えるのではないかと考えています。そんなまちで考えられる役割と取り組みについてお話しさせていただきます。



信州の自然と農と教育 渡辺隆一（信州大学教育学部）

野外での体験は、理科学的な自然観察に終わるものではなく、確実に地域の課題学習につなげることができる優れた教材です。地域の自然を個々の自然物として見るだけではなく、その自然が育んできた地域の暮らしと文化、そして地域の歴史、さらに人類が歩んできた進化の過程まで大きな歴史の流れとして、過去を学ぶことが、未来にどんな地域を創造してゆくのかの知恵と工夫の源泉になるのだと思います。



NPO 法人自然文化誌研究会
〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村 3337-2
TEL: 0428-87-0165 npo-inch@wine.plala.or.jp
<http://www2.plala.or.jp/npo-inch/>



特定非営利活動法人 ECOPLUS
〒101-0044 東京都千代田区鍛冶町 2-5-16-4F
TEL/FAX 03-5294-1442 info@ecoplus.jp
<http://www.ecoplus.jp>